
バカとリンと召喚獣

風影 黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリンと召喚獣

【Nコード】

N0900Z

【作者名】

風影 黒

【あらすじ】

試験召喚獣システムが使われた試験校、文月学園。そんな中、Fクラスに所属することになった黒井小鈴。幼なじみの吉井明久と共に勉学とオカルトと恋(?)に忙しい学園生活をどう突き進む!?

プロローグ（前書き）

処女作となります。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

プロローグ

文月学園に入学して二度目の春がやってきた。

校舎へ続く坂道を歩く人影がチラホラ見えてきた中、普通の人らしくない集団に囲まれている人影があった。

肩の辺りがボサボサに切られている赤い胴着を着ている武道家。下駄にリーゼント、学ランと昔のマンガから出て来た様な不良（口には葉っぱ）。剣道着を着てる者。薙刀を構える女性や覆面に鎌をもつて愛を叫んでいる者（？）。どう見ても普通じゃない空間が文月の登校路で起こっていた。

だが、周囲にいる登校途中の生徒達は誰も目を向けない。気にもかけずに坂を登っていく。

それもそのはず。なにせ、普通じゃないこの空間がここで起こるのはよく（・・・）ある事だから。

そして、集団に動きがあった。

「……今日こそ、今日こそ勝たせてもらうぞ、『黒子』!!」

「いざ」

「…尋常に」

「……………勝負!!!!」……………一人、二人、果てには全員が雄叫びの後、中心目掛け走り出す。その表情には決死さえも見えるようだった。

さて、中心にされてしまった人物はと言うと。焦った様子も見せていない。手に持っていたカバンを足元に落とし、指で眼鏡にかかる銀髪を払いながら、接近してくる人々を見ている。

そして…

「……ニヤハ！」

鈴の音と共に姿が消えた。

「西さん、二一八才」

玄関前で生徒達に封筒を配っている先生の中でも目立つ、浅黒い肌で短髪、去年の担任である先生に挨拶をする。

「二一八才は朝の挨拶じゃないぞ。それに、西村先生と呼ばんか、黒井！」

西村宗一郎。別称、鉄人。生活指導の鬼と呼ばれているが、去年から親友や悪友のおかげで学園で一番親しくなった先生だろう。

「そうでした。すみません、西さん」

それでも変えないから溜息混じりでこちらを見る。半ば去年から変わらないうり取りで根負けしているのだろう。

「それとだ、黒井」

西さんが視線をずらして今登ってきた坂道に目を向ける。

「あれはまたお前か？」

「ん、でも誰にも触れてませんよ？」

視線の先には先程の人々が倒れて山積みになっていた。

「……まあいい。ほら、お前のだ」

そう言う箱の中から一枚の封筒を手渡す。

「ありがとうございます。……中身はわかりますが」

「そうだな。しかし、お前のやった事は人として誇れる事だ」

「……それでは失礼します」

頭を下げ、脇を通り抜けていこうとするが足を止め、再び話し掛ける

「西さん。カンなんですが今年もお世話になります」

「……ということはあいつらともか、ヤレヤレ」

お前のカンはよく当たるしなつと深い溜息をつく西さんに苦笑しながら今度こそ下駄箱へと向かう。

「……誇れる事、ね」

取り出したペーパーナイフで封筒を開き、中にあった紙を引っ張り出す。

『黒井小鈴…… Fクラス』

「オレはそんなんじゃないよ」
こうして最低クラス生活が幕を開けた。

プロローグ（後書き）

お目通し、ありがとうございました。
良い作品を作れるよう、訂正、感想、アドバイスなどをしていただけたら嬉しいです。

プロフィール（前書き）

プロフィールです。

少しオリ主を特殊にしてみました。

プロフィール

プロフィール

黒井小鈴（くろい こすず）

銀髪ショート 眼鏡 猫（虎？） 明久に忠臣？

身長、明久より10？ぐらい低い

体型 細型だが鍛えているから女子（！！）としては少し重い

特技、暗算、嘘発見、手品

苦手、嘘をつくこと、怖い話

性格、明久を中心に回ってる？ 多人格

一人称ー二人称ー三人称、オレーお前ーあいつ

明久に恩があるので明久に尽くしたいとすら考えてる。

恋。無双の華雄さんに眼鏡をかけ、胸なしな感じ。目つきがきついのもあってあまり女子らしく見られず、楽だからと男子の制服を着用。

明久の上の階に一人ぐらし。明久と家族で知り合い。

プロフィール（後書き）

お目通しありがとうございました。

ということで、オリ主は男娘と書いて（オトメ）と言っのを目指してみます。

アドバイス、訂正、感想は大歓迎です

一話目（二学年・試召戦争、開始）（前書き）

更新です。

鈴がFクラスの面々とどういった感じなのかをだしましたが…予想より長くなりました。

簡潔にまとめる他の作者さん達を尊敬します。

…こちらも長くなってしまいました。

楽しんでいただけたら幸いです。

一話目（二学年・試召戦争、開始）

「……大戦時代か、ここは？」

真つ直ぐ旧校舎に向かい、Fクラスらしき教室の前にやって来たのだが……

「ちゃぶ台（脚折れ少々）、座布団（中身スカスカ）、窓は割れて何故か×印にテープ……ここだけ『欲シガリマセン、勝ツマデハ』の時代に来たか？」

おまけに天井にはクモの巣、教室に敷き詰められた古い畳はかび臭い上、キノコが生え、壁にひびと落書きで埋め尽くされている。正直、廃校の方がましじゃないか？

「ん？そこに居るのは鈴か？」

呆れて教室を眺めていたら一人の生徒がこちらを見て手を振っていた。

目を向ければ去年のクラスメート、女子が羨むスラッとした身体。女性が嫉妬しそうな優しい微笑み。男性を虜にしそうな癒し空間を漂わす木下秀吉（♂）がいた。

「ん？主、妙な事を考えなかったか？」

「んにや。去年と同じくだなんて思っただけさ。しばらくぶり、ヨシヒデ」

「ワシは秀吉じゃ」

「羽柴の？」

「木下じゃ」

「徳川は？」

「秀忠じゃな」

『イエーイ』

「あんたらまたやってるの？」

軽い掛け合いをしていると一人が呆れたようにしながら声をかけてきた。

見てみれば友人がいた。

「おはよう、スズ」

「おはよう、ミナ。ミナもやっぱりFだったか」

スラッとしたモデル体型。ポニーテール。帰国子女の友人、島田美波。挨拶を返すがニッコリ笑ったかと思っただけこちらの腕を掴み…

…、

「やっぱりって何！？ウチがバカだっていいの！！？」

「朝から巩固めはきつい、キブキブ」

「のわりには余裕ありじゃな」

関節技をかけられた。若干余裕はあるがきついものはきつい。

「ミナ、江戸幕府が開かれたのは何年？」

「…」

「ベンゼンの化学式は？」

「…」

「さて、言うことは？」

「すみませんでした」

未だに漢字がイマイチらしいがこういったのもあるからFクラス入りなのだ。まあ、そんなことを言えば暴走して、関節技が骨折技に変化するから言わない。

「それと、早く解かないとムツチーが覗いてるぞ？」

「えっ？キヤアアアア！！」

「……覗いてない」

「鼻血で畳が赤いぞい」

いつの間にいたのか小柄、気配なし、カメラ小僧。土屋康太ことムツチーがいた。

「全く、相変わらず。むっつりスケベめ」

「…おれはスケベじゃない」

「何色だ？」

「白」

「コラアアアア！！！！！！！！」

怒声と共に身を伏せれば頭上を美波の右足が通る。髪を二、三本持つていき、その威力を感じさせる。

「あ、あんたらー！！こんな場所でなんてことを言うのー！！？」

「誰も誰の、何がとは言つてないが？」

「…誘導尋問は卑怯」

「誘導と尋問、まとめて辞書で調べてこい」

「おーい、そこ。悪いが騒ぎはそこまでにしてくれ」

じゃれあいがそこそこになってきた所で声がかけられた。見てみれば教壇に赤髪、長身の奴がこちらを見ていた。

「…なんだ雄ツーか」

「待て、ツーってなんだ？俺はロボットじゃないぞ？」

「んじゃU2」

「変わってないぞ！？雄がUに変わったぐらいだぞ！？余計ロボットぽくなったぞ！？」

「えっ！？違うっけ、戦闘用・アンドロイド、サカモト・U2。モデル、悪鬼羅刹」

「それっぽく付けるな！？ってか1がいるのか！？別モデルがあるのか！？」

「っでなんで教壇に立ってんだ？」

「話をいきなり戻すなー！！…ああ先生が遅れているらしいから、代表としてまとめようと思つてな」

こいつが代表であるのを驚くと同時に以外な行動に感心した。

野生児、狂暴、外道。去年からの悪友、坂本雄二。それがFクラスとは言え、代表として行動するのが意外に思……

「それに俺の兵隊になる奴らの顔を見ておきたかったからな」
訂正、やっぱこいつはこいつだ。

「それはそうと、あのバカはまだ来てないのか？」

「…来てないけど、あまりバカバカ言うな」

「事実だろ？」

「……なら、誰かさんが黒髪、長髪の撫子美人さんと仲が良いって事実を言い触らしても事実だからいいよな？」

「なっ！？待て！！お前、何処でそれを！？」

「さて、このクラスから始めるか」

「待て！！」

「皆知ってる？こいつ、あのきり「すいません、ちよつと遅れちゃいましたっ」」まさんと……って」

出鼻をおもいつきり碎いてくれた人物は、ネジが一本抜けたような表情。ちよつと中性的な顔。イジられやすい雰囲気。そして、学園内、唯一の肩書を持つもの、吉井明久がいた（遅刻）。

「……リンに雄二、何やってんの？」

「……ハッ、早く座れ、このウジ虫野るウオオオオオオ！！……？」
スダタタタタツツ！！

明久を罵倒しようとした雄二だが飛来物によって中断され、膝をがに股に開け、両手を股間に持つてきた奇妙なポーズで固まっていた。雄二の皮と制服すれすれの所に鈍い光を放つ大量の苦無と手裏剣が刺さっていた。そしてそれを行った犯人は……

「っテメー、何しやがる！！？」

「……スマン、条件反射だ」

オレである。

一話目（二学年・試召戦争、開始）（後書き）

個人的に、猫は気まぐれで掴み所がないとおもってます。
アドバイス、感想などいただけたら嬉しいです。

プロフィール + α (前書き)

オリ主が想像しにくいので追加します。

プロフィール + α

小鈴の容姿、召喚獣について

容姿、恋。無双の華雄に文月学園の制服（男子）を着用。外見からの見た目は胸なしにしてください。

眼鏡着用。

首に鈴付きチェッカーを付けます。

手袋を付けています。

手袋着用などの理由や秘密は作品中で少しずつ出していきます。

召喚獣

華雄です。ただし、武器は戦斧と鉄扇を片手ずつに持っています。能力はCクラス上位くらい。

得意科目：数学、170～200

苦手科目：国語、80～110

他は130～160ぐらい

クラス基準

Fクラス：900未満

Eクラス：900～1200

Dクラス：1200～1500

Cクラス：1500～1800

Bクラス：1800～2000

Aクラス：2000～

（Aクラス上位3000以上）

科目数：10（国語、古文、数学、化学、生物、物理、保険体育、

英語リスニング、英語W)と考えると
他にも何か変更、追加ができればコチラに追加します。

プロフィール + α (後書き)

質問などがありましたら回答をこちらに追加します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900z/>

バカとリンと召喚獣

2011年12月6日13時50分発行